

---

「オレ様、殺人事件。」

CASIO

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「オレ様、殺人事件。」

### 【NZコード】

N5055D

### 【作者名】

CASHO

### 【あらすじ】

今までたつても出世が出来ない刑事、物知圭一は、靈感を持っているせいで、事件の犯人に殺され幽体離脱をしてしまった少年、有沢啓人と出会う。啓人は殺されたにも関わらず、犯人の顔を覚えていないらしく・・・。アンバランスなコンビが織りなす、爆笑ミステリー。

## ケイジのファイル

このファイルに記されている事は完全にノンフィクションであり、実際の団体やら人物やらとはかなーり関りがある。

これは、俺とある少年との出会いによる記録だ。まあ、読みたいと思うなら

読めばいい。だが、なるべく他言無用である」とを願いたい。

ピー・ポー・ピー・ポー、、、、

サイレンの音がけたたましい程に響く。

特に仕事を頼まれる訳でもなく、かと言つて、そんなに忙しくなかつた俺は、

現場近くの公園のベンチで、コーヒーをすすつていた。

「はあー、つたく連續殺人事件なんて、世の中物騒になつたもんだけよなあ。

まあ、事件がないと飯が食えなくなるのは俺たちなんだけど・・・。

「ひるせえなあ、サイレンと幽霊の音が混じつて頭痛てえ」

俺は物知圭一<sup>ものがじけいいち</sup>。ケイジだ。いや、名前を連續して言つたわけじゃない。

けつして、物知りなわけでもないし、二クラス・ケイジでもない。

そして、その俺が特技とする物、それは「幽霊」が見える。物心ついた頃からは、もつ見えていた。だから怖くはない。

その時の俺は、まさかこの能力が役に立つとは思つてもみなかつた。

「ヒーリー、一ノラス君。仕事わざつてちや給料減らすぞ。  
ただでも皆忙しつて言つて、ヒーリーなんてのん気に飲むん  
じゃない！」

「だつて俺には何もやる事がないつすからねえ。

・・・・・香山先輩、一ノラスつて呼ばなこ下さい」

この人は香山瑞希先輩。俺の上司だ。とても気が利くし、頭も良  
いし、  
その上超絶の美人だ。ああ、今日も見田麗しい。

「仕事はあるよ。今すぐに、事件に巻き込まれたと思われる  
16歳の高校生の襲われた現場を見に行つてくれない？」

「うして俺は、先輩に促されるままに、車を動かした。  
現場はマンションから10分くらいの所にあつた。おそらく通学  
路だつ。

そこにも、たくさんの野次馬と警察がたかっていた。

「こんなとこに来て、一体何をしていいのやら・・・・・  
事情聴取も面倒くわいし、推測できるほどの頭を持つてるわけ  
もないしなあ

・・・・・あれ、どつかで見たことのある顔だ」

と言つても、幽霊だ。何故かしょぼしょぼと歩いてゐる。

「君、どうかしたの？ 何か未練が残つてゐるのか？」

そう呼びかけると、少年はびっくりしたようにこつちを振り向い

た。

「…………おっさん、俺が見えるのか！？？」

「お、おっさん…………」

それが少年、有沢啓人との出会いだった。

## ケイトの日記

これは俺様が高校生になつてちょっととしたくらいに起こつた、ある事件の話だ。

言つとくけど、高校生の書く日記なんて、「中学生日記」くらいの程度しか

思つてなかろう。 だけどこれは違う、本物の事件だ。 実際にこんな事件が、

周りに起こつている事をよく知つて欲しいから俺は書いていく。

・・・・・「ホン、そんなに堅苦しくしなくていいから、俺様の日記を読め。

その日の俺様はいつもと変わらない日常を送つていた。

一つ、変わつた所と言えば、親父が珍しくニュースを見ていた事、それだけだ。

「連續殺人事件なんて物騒だなあ。おい、啓人、せいぜい殺されないよ」  
「ちやーんと家に帰つて来いよ！――！」

「つたく、ありえねー事言うんじゃねえよ。……行つて来るからな。」

「いってらっしゃいへへ」母さんが笑顔で見送った。

俺の名前は有沢啓人。ありさわけいと冒頭で触れたが、高校一年生だ。

成績はそこそこ、顔は美形、運動神経抜群、まあ、自信家のせいで性格は悪いと称されているが、それも愛嬌の内として友達も居る。

普通に授業をして、普通に仲間で騒いでいた、ごく平凡の毎日。だが、そんな普通の帰り道に、突然悲劇は訪れた。

俺様、有沢啓人は殺されたのだ。

ありえないくらいの速さでありえないくらいの痛みが俺を貫いた。何、誰にやられただと？ 朝、ニュースでやっていた、連続殺人犯にだ。

やたらと硬い何かで殴られた。 髪を触ると手にはベットリと血が付いていて、眩暈がする。

そんな霞みゆく意識の中、俺は殴つた張本人の顔を見ようと必死に目を開けた。

「・・・・・お、男・・・・・・・・・」そのまま、かくん、とうなだれた。

ピー・ポーピー・ボー

薄い意識の中、サイレンのような音で起しきされた。起き上ると信

じられないくらいに体が軽い。

何故だろ?。 そして、また疑問が一つ。 なんと人だかりが、俺様を囲んでいるのだ。

その中には警察官も数人居て、野次馬達を取り押さえている。

ありえない、倒れているのにしてみれば、ありえなすぎる。そして、数秒してからその謎は解けた。

「俺は既に「死んでいる」のだった。

立ち上がった俺の足元には、頭を殴られ、血を流して倒れている「俺の死体」が転がっていた。

そして今、立っている自分自身の手を見つめてみた。

「はは、はははは・・・・なんかコレ、透き通つてねえか?・・・・

6

俗に言つアレだアレ。 なんだっけな。「ゆ」から始まる言葉だよ。つて、まさかのまさか、

「これつて、ヽヽ幽体離脱ううーーー!

「!-?-?」

その後、俺様なりに元の体に戻ろうとするが、水を片手で掴むかのように、何も変化はなかつた。

おまけに、自分の体は意識不明の重態として救急車に運ばれ、持つていかかる始末。

父さんや母さんも、心配してるだろ?。 まさか本当に死ぬとは思つてもみなかつたのだ。

あんなに忠告してくれたのに・・・・・(冗談ぽかつたが)。

「もう、何していいのか分かんねえ……」いつむいた瞬間だつた。

「あれ。君、ここで殺された少年?」人の良さそつた男が俺に話しつけてきた。

「おっさん、お、俺が見えるのか!？」

「お、おっさんって……酷いなあ……」

それが、刑事のケイジさんとの出会いだった。

## ケイジのファイル

どうやら殺された少年は、幽体離脱をしているようで、ここで話しかけたら、俺が一人でふつぶつ言っている、頭のおかしな奴だと思われる可能性が高いので、俺は少年に「ちょっと場所を変えようか」と、呟いた。

「で、もう一回だけ聞くけどさ……」

俺が少年を連れて行つた場所は、現在俺が住んでいるぼろつちいアパートだつた。

……こじながら誰にも話を聞かれやしまい。

「なんで啓人君は何にも覚えてないの!! 仮にも自分が殺されたんだよ?」

覚えてないわけないじゃないか！――

なんと、事情聴取をするにも、少年は何も覚えてないと言つのだ。  
これでは場所を変えた意味が無いじゃないか。

少年の名前は有沢啓人。高校生。学校の帰宅途中に犯人に襲われた  
らしい。

「だつてよ、圭一さん。記憶が吹っ飛ぶくらい殴られたんだぜ?  
いや、俺様の綺麗な顔をガツンと・・・」

・・・びつやらナルシストみたいだ。

「ああ、思い出した！――

「な、何を！？！？」

「男だつた」

けいと君がそう言つた瞬間、俺はがくんとうなだれた。

「男ぐらいいくらでもいるだろ・・・」

「大体さ、何でけいじさんはそんなに真剣なんだよ――」

不機嫌そうに質問するけいと君に、俺は真剣に言つた。

「そりや、連續殺人事件だぞ。これを俺一人で解決したら、大手柄  
じゃないか」

「何でけいじさんの私利私欲の為に、俺様が悩まなくひやいけねえんだよ」

理不尽じゃないかーと、ブーリングをするけいと君に、俺は言った。

「じゃあさ、俺はお前が本当の体に戻れるまで、ずっと協力する」

「ふーん、で?」

「その代わり、啓人君は、俺が事件解決に至るまで、隅々まで協力するつてわけだ」

けいと君は、しばらく悩むそぶりを見せると、真剣に俺の方を向いた。

「分かった。それで行こう。どうせこのままじゃ、体に戻れないのがおちだからな。

はは、俺様の推理力をなめんじゃねーよ!」

こうして俺、物知圭一は、有沢啓人と共同戦線を張る事になったのである。

## 出会い（後書き）

初めての投稿となります。  
題名の通り、一人称が「俺様」である、啓人が殺された  
ので「オレ様、殺人事件。」つてわけです。  
感想よろしくお願ひします^ ^。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5055d/>

「オレ様、殺人事件。」

2010年10月9日00時39分発行